

「命を憎む人」

ヨハネによる福音書 12 章 24～26 節

大学事務局学長室 学長室事務課 寺島 大祐

私は、大学の学長室事務課の職員として働いています。学長の秘書業務や、学内会議の準備等が主な仕事であるため、普段学生の皆さんと直接お会いする機会が少ないのですが、本日、貴重な対面礼拝で皆さんと顔を合わせ、礼拝の時を共にできること、また、クリスマスを前にしたこの時に、聖書の言葉を共に聴くことができることは、大きな喜びであり、感謝したいと思います。

突然ですが、みなさんは自分にとって「一番大切なものは何か」と聞かれたら何を思い浮かべますでしょうか。よく聞かれる答えとしてまず「家族や友人」、「健康」、そして「お金」、中には「夢」という言葉を挙げる人もいますかと思えます。そして、この問いに対して必ず出てくるのは「命」という答えではないでしょうか。私も小さな子どもだったころから、命を大切に、命を失ったらどうにもならない、と教えられてきました。

何があっても自分の命だけは大切にしなければならないという考えが、私の中にも根付いていました。

「命」という言葉に関連している箇所として、本日の聖書の言葉を選びました。25 節をもう一度読んでみます。

「自分の命を愛する者は、それを失うが、この世で自分の命を憎む人は、それを保って永遠の命に至る。」

多くの人が自分の中で大切なものとして、かなり高い順位に位置付けるであろう「自分の命」ですが、ここでは、その命を愛する者より、それを憎む者、つまり自分の命を一番と考へない者の方が、逆にそれを保つことになる、ということです。

私は小学校低学年の頃から、高校 2 年生で基督教の洗礼を受けてクリスチャンになるまで、ずっと日曜日の教会学校に通っては、聖書の言葉に触れ、その話を聞き続けていましたが、最初にこの聖書の言葉を読んだとき、違和感を覚えたことを記憶しています。大切だと教えられてきた自分の命、しかし、その命を憎むことが、基督教では勧められることなのだろうか。

幼い頃の私に疑問を投げかけた、この「自分の命を一番大切なものとしなさい」という教えは、何を示しているのかについて、考えてみたいと思います。

「命が一番大切」という言葉を聞いて、わたしは必ず思い起こす一つの詩があります。有名な詩人である星野富弘さんの詩の一つで、このような詩です。

「いのちが一番大切だと思っていたころ生きるのが苦しかった
いのちより大切なものがあると知った日生きているのが嬉しかった」

私がこの詩を初めて読んだのも、まだ小学生の頃だったと思います。星野さんの詩はどれも、あた

たかく、情景に満ちており、ともに彩られる草花の絵と共に、心を穏やかにさせてくれるものばかりです。

しかし、この詩を読んだ時だけは、なぜか小さな違和感が私の中に引っかかったことを覚えていません。今思えば、それは、先ほどの聖書箇所から受けた違和感と同じものだったのかもしれませんが。自分の中でそれより大切なものはないのではないかと考えていた命。でも、それを一番としているときは人生が苦しく、命より大切なものを知ったとき、生きているのが嬉しくなったというのです。星野さんが知った、命より大切なものとはいったい何だったのか、当時の私はそれを知りたいと思っていました。

ご存知の方も多いかと思いますが、この星野富弘さんは、24歳で公立中学校の教員となったわずか2ヶ月後、クラブ活動の指導中に頭から落下して頸髄を損傷し、首から下の体を一切動かすことが出来なくなりました。そして、その怪我の治療のために、実に9年もの間、入院生活を送られたのです。特に入院してから容態が落ち着くまでの間の治療は壮絶なものであったようです。そして、それまで体操や登山で鍛え上げ、凡人には負けないと自負していた肉体の自由を奪われてしまったその葛藤は、想像するに余りあるものがあります。

体が全く動かせない中、病院の医師やスタッフ、そして特にお母さまをはじめとしたご家族の懸命な看護が、絶望のような状態にあった星野さんを支え続けました。また、それまで関わりのなかった地元の教会の牧師先生や、信徒の方の中にも、毎週見舞いに訪れてくれた人がいたそうです。

特に、お母さまの付きっきりの看護の様子には胸を打たれました。時には、体の動かせない苛立ちや不安の中で、「産んでくれなけりやよかったんだ」と息子の罵声を受けたこともあったそうで、それでも自分を顧みずに、ひたすら看護に徹された姿は、まさに「愛」としか表現できないことだと感じました。周囲の人々の、時には自分自身のことを犠牲にしてまでも、星野さんにむけられた多くの愛があったのだと感じました。

次第に様態が安定した星野さんは、口に筆やペンをくわえ、詩や絵をかくことで、これらの「愛」を表現することができるようになっていきました。また、入院中にキリスト教の洗礼を受けています。

これらのことは『愛、深き淵より。』という星野さんの著書に記されていることから知ることができました。自分に向けられた「愛」、これこそが星野さんが知った、命より大切なものだったのではないかと、私は考えるようになりました。

星野さんの経験を知ることを感じた、命より大切な「自分に向けられた愛」を意識しながら、子どものころ、私が違和感を覚えた「自分の命を憎む人は、それを保つ」というあの聖書の言葉に向き合うとき、一つ前の24節の言葉が訴えてくるのを感じました。

はっきり言うておく。一粒の麦は、地に落ちて死ななければ、一粒のままである。だが、死ねば、多くの実を結ぶ。

一粒の麦とは、イエス・キリストのことで、地に落ちるとは、神様がその独り子であるイエス・キリストを地上に送ってくださったことを表しています。そしてそのキリストは、人間の罪に対して、代わりに十字架刑によって「死ぬ(命を捨てる)」という形で愛を示してくださいました。

私には、星野富弘さんのように生命の危機となるようなけがを負ったこともなければ、手足が動かず、本当に絶望してしまうような経験をしたこともありません。にもかかわらず、命を失ったらすべて終わりだと、自分の命に固執し、自分の命を一番と考え、自分の内側にばかり向いてしまう私の心の罪

に対して、神様はイエス・キリストを送ってくださいました。自分の外へ、自分以外の人たちへ、そして神様へと心に向けることが出来るように、一粒の麦として、イエス・キリストを地上に落とされたのです。これは神様からわたしへの愛そのものであり、「命を憎む」とは、この神様からの愛を一番大切なものと位置づけることではないかと考えています。

大学でもツリー点火祭を終え、クリスマスに向かってキャンパス内の装飾もなされています。それらを見ているだけで、なんとなく華やかで楽しいお祭り気分になる期間かもしれません。しかし、クリスマスが、イエス・キリストの誕生を祝うときであることを知っている方も多いことでしょう。

クリスマスの時が、自分にとって一番大切にすべきものについて、聖書をとおして考える機会にできれば素晴らしいと思います。

(祈り)

主イエス・キリストの父なる神様、今日は大切な学生の皆さんと礼拝を共にすることによって、聖書が私たちに勧める、本当に大切なものについて考える時があたえられたことを感謝いたします。私たち一人ひとりの命は、大切なものです。しかし、大切にすあまり、自己中心的になり、与えられているもっと大切なものに気が付かないこともあるかもしれません。クリスマスを前にしたこのとき、また、聖学院大学に属している今このときを、あなたがキリストの誕生を通して私たちに与えてくださった愛について、考える機会とすることが出来ますように。イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン。

2022年12月9日 聖学院大学 全学礼拝